シンクロの見事さ～『モスラ対ゴジラ』～

長谷川哲也　三重フェス

１９６４年　８９分
監督　本多猪四郎
脚本　関沢新一
出演　宝田明

今年、７月１５日から９月３日まで、名古屋市博物館において「ゴジラ展」が開催されている。

ゴジラは昭和２９年に製作されてから、シリーズ化され現在に至っている。当初は大人・子どもに限らず一般大衆を対象につくっていたと思われる。そのことが功を奏し、十分に練られた脚本に基づいてつくられていた初期の作品（『ゴジラ』→『ゴジラの逆襲』→『キングコング対ゴジラ』→『モスラ対ゴジラ』）はよく出来ており、何度観ても飽きない。ところがキングギドラが登場する『三大怪獣地球最大の決戦』あたりから、子どもたちを意識してつくられるようになり（昭和４０年代、東宝は子どもたちの夏休みに合わせて、「チャンピオン祭り」と称し、ゴジラ映画を上映していた）、マンネリ化し、作品の質は落ちていったように思える。

４作目にあたる『モスラ対ゴジラ』について私見を述べてみたい。物語の前半は台風によって流れついたモスラの卵をめぐって、見世物にして一攫千金をもくろむ興行師たちと卵の奪還を願う小美人（ザ・ピーナッツ）、宝田明・星由里子たち人道主義者との間で虚々実々の駆け引きが行われる。

ゴジラは中頃あたり、干拓地から登場し、中部地方を席巻していく。四日市市のコンビナートを破壊し、伊勢湾沿いに北上、名古屋市に上陸し、栄のテレビ塔、続いて名古屋城を破壊する。

成虫モスラが現れてゴジラと対決するが、卵をかばうように羽をのせて力つきてしまう。勝ち誇ったゴジラの進撃を阻止するため、今度は自衛隊が高圧電流を使った兵器を駆使して立ち向かうが歯が立たない。

その頃、モスラの故郷インファント島の島民と小美人の祈りによって、卵がかえり二匹の幼虫が姿を現す。二匹にしたのは、兄弟が力を合わせて親の仇を討つという、日本人が好みそうな展開にしたかったのだろう。そして、いよいよ物語はクライマックスへと進んでいく。

定期船に乗り遅れた離島の分校の若い女教師と子どもたちは、難を逃れるため山中へ入っていく。この当時、弱者イコール女性と子どもという図式がはっきり確立していたも

のと思われ、また、若い女教師という設定は、はかなげで、一層の不安を助長する。そこへゴジラが迫ってくる。そのゴジラと戦うためにモスラの幼虫が海を渡っていく。先生と子どもたちを救助するため、宝田明たちが高速船で島へ向かう。この４つの場面がうまくシンクロされ、しかも伊福部昭の音楽が更に臨場感を高めていく。関沢新一の脚本と本多猪四郎の演出をはじめ、製作者たち全員が一丸となった仕事っぷりに脱帽である。

こうしたシンクロを使った演出は後のいくつかの作品でも使われている。名作『砂の器』では、コンサートホール、警視庁での合同捜査会議、過酷な宿命を背負って旅を続ける巡礼の親子の３つの場面が同時進行し、観客を感動の渦へ導いていく。

やがて洞窟に隠れていた先生と子どもたちは救助され、後顧の憂いを断った観客の視点は、ゴジラとモスラの対決に絞られていく。

関沢新一は昭和４０年代テレビに進出し、初代ウルトラマンの脚本を手がけ、沖縄出身の脚本家金城哲夫を育てていくことになる。

この作品は昭和４２年４月頃、亀山劇場で、『フランケンシュタインの怪獣　サンダ対ガイラ』(昭和４１年東宝)・『大魔人怒る』(昭和４１年大映）と共に３本立で上映されていた。亀山劇場は昭和初期から昭和５４年まで、亀山市本町に所在していた映画館である(現在は伊藤文具店駐車場になっている)。異なる会社の作品が３本立で上映される。現在、こうしたことはあり得ないが、当時は普通だったのかもしれない。その頃、私は小学校１年生。亀山在住の叔父の結婚式のため、親に伴われて叔父の家へ来ていたが、大人たちが忙しく働く傍らで居場所を失いかけていた。そうした時、この上映看板を見つけた私は周囲に頼みこみ、快諾してもらった。たまたま叔父の家から徒歩１分以内という利便性もあったのだろう。叔父が受付まで送ってきてくれたが、そこから先は３本の上映が終わるまで、一人で鑑賞していた。その後は、友達の家族と一緒に津の映画館で観たり、テレビで観たりした。一つの作品をこれほど鑑賞することは珍しく、よほど気に入っていたのだろうと思い出される。